

## 160 バセドウ病の放射性ヨード治療における炭酸リチウム (Li<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>) の有用性

石川直文, 杉本高士, 盧在徳, 百溪尚子, 小林 薫  
鈴木 章, 真鍋嘉尚, 尾崎修武, 西川義彦, 伊藤國彦  
(伊藤病院), 和泉元衛, 長瀧重信 (長崎大1内)

バセドウ病における<sup>131</sup>I治療では、投与線量は<sup>131</sup>I摂取率と有効半減期に反比例する。最近Li<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>を併用すると<sup>131</sup>I摂取率に影響を与えず、有効半減期が延長する事が明らかになった。今回は<sup>131</sup>I投与量に対する影響を臨床例で検討した。対象は未治療バセドウ病患者28例。1週間のヨード制限を行ない200μCiの<sup>131</sup>Iを服用させ、摂取率と有効半減期を測定し(前)、次いでLi<sub>2</sub>CO<sub>3</sub> 600mgを服用させ同様に測定した(後)。血中Li<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>濃度は服用後3, 7日目に測定した。摂取率は前68.0±5.6, 後69.9±5.6%と有意差はなかった。有効半減期は前4.8±0.8, 後7.0±0.5日(p<0.001)と有意にLi<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>投与後が延長した。放射線投与量は前(前値より求めた値)4.4±1.6, 後2.9±0.7mCi (p<0.001)とLi<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>投与後で有意に減少していた。血中濃度は、3, 7日目各々平均0.31, 0.32mEq/lで重篤な副作用も認められなかった。今回の検討では、中毒量よりかなり低濃度の血中濃度で<sup>131</sup>I投与量を34.1%減量出来た事より、Li<sub>2</sub>CO<sub>3</sub>併用は安全性の面も含めて臨床に十分有用である可能性が示唆された。

## 161 甲状腺機能亢進症における放射性ヨード治療後の甲状腺ホルモンの変化について

広田嘉久, 高木善和, 吉岡仙弥, 古閑幸則,  
七川静彦, 古嶋昭博, 高橋睦正(熊大 放)  
富口静二(国療再春荘 放)

甲状腺機能亢進症に対して放射性ヨード治療を行い6ヶ月以上の観察で臨床的に3ヶ月以上正常を示した28症例において甲状腺ホルモンを測定した結果、T<sub>3</sub> T<sub>4</sub>はほとんど正常値を示したが、FT<sub>3</sub>は67.8%、FT<sub>4</sub>は53.6%と高値を示した。T<sub>3</sub>とFT<sub>3</sub>、T<sub>4</sub>とFT<sub>4</sub>の相関はr=0.88、r=0.73でそれぞれみられた。次に放射性ヨード投与後の甲状腺ホルモンの変化をみると、ほとんどの症例が投与後1~2週間で急速に降下し、その後は治療効果のないものは最上昇する傾向にあり、また効果のあるものは漸次降下してゆく。さらに投与後1日より連日採血して1週目までの甲状腺ホルモンの変化をみると、大略、変動はあるものの、漸次降下してゆく傾向にあった。

種々検討の結果、FT<sub>3</sub>は放射性ヨード治療後の機能状態を鋭敏に反映していると思われた。

## 162 甲状腺分化癌骨転移に対するI-131治療成績について

福島佳奈子, 日下部きよ子, 唐沢久美子  
兼安祐子, 太田淑子, 川崎幸子, 牧 正子  
広江道昭(東女医大 放)

甲状腺分化癌の骨転移でI-131治療の行われた21例について、治療効果を中心に検討した。対象21例の放射性ヨード治療施行時の年齢は40歳から74歳迄(平均58.0歳)で、男性5人、女性16人である。

観察期間はI-131初回治療後1.8年から12.2年(平均6.1年)である。

病理組織所見は乳頭癌2例、濾胞癌18例、そして不明1例と、圧倒的に濾胞癌が多かった。

初回I-131治療時に骨のみに転移が見られたのは14例で、7例は肺にも転移が認められた。

I-131投与量は1回75~156mCiで、1~5回(平均2.6回)総量は100~596mCi(平均290.8mCi)であった。

21例中12例は初回I-131治療後1.1年から9.9年(平均3.6年)で死亡した。これは初回甲状腺腫瘍治療後1.2年から18年(平均7.4年)であった。

I-131治療効果に与える因子として骨腫瘍のヨード摂取能の他、腫瘍の大きさ、肺転移の有無などが関すると考えられた。

## 163 サブトラクション法による副甲状腺腫の局在画像診断法に関する研究。一手術施行例44症例での評価一

末廣美津子, 立花敬三, 福地 稔(兵庫医大 核、RI)

コンピューター利用、2核種投与による副甲状腺腺腫の局在画像診断法を確立し、その臨床応用を行って来たが、今回、手術により肉眼的に腺腫の確認が行えた44症例を基に、本法の臨床的評価を行った。

44症例の内訳は、原発性副甲状腺機能亢進症7例、続発性副甲状腺機能亢進症37例で、肉眼的に176腺を確認し、うち150腺の腫大を認めた。腫大腺腫の重量は、30mgから5.6gまでに分布し、うち、500mg以下が47.4%を占めた。

腫大腺腫のSpecificityは92.3%、Accuracyは85.2%であった。Sensitivityは腫大腺腫では48%であったが、250mg以上では54.3%、500mg以上では62%、750mg以上では73.6%、1.1g以上では80.5%、2.1g以上では100%との成績が得られた。

以上の成績から、本法は従来報告されてきた副甲状腺腺腫の局在画像診断法に比べ、ほぼ良好な結果が得られる事が確認出来たことから、臨床的にも有用だと結論出来た。